

# 第一三共の沿革 ～統合までの歩み～

第一三共は、創薬型企業としてそれぞれ100年の歴史を持つ三共と第一製薬が統合して生まれた会社です。

三共では、生体物質の抽出・発酵技術といったバイオ系の技術で生み出した**タカジアスターゼ**、**アドレナリン**、**オリザニン**などを事業化し歩み始め、その後もその流れを汲む抗生物質を数々生み出してきました。高コレステロール血症治療剤として、世界の医療を変革したスタチンの嚆矢となる化合物を生み出し、それから創生した**プラバスタチン**もまた、バイオ系の発酵技術を応用して生み出された画期的新薬でした。有機合成においても、ベストインクラスとなった**ロキソプロフェン**や**オルメサルタン**を生み出してきました。

第一製薬では有機合成技術により、化学療法剤の草分けである**サルバルサン**の国産化からその歩みを始めました。その後、抗プラスミン作用（止血作用・抗炎症作用）が再び注目されている**トラネキサム酸**を事業化し、循環器領域で抗血小板療法を切り拓いた**チクロピジン**の開発上市に成功してきました。合成抗菌剤の傑作とも言われる**レボフロキサシン**はその幅広い抗菌活性で日本のみならず世界的に歴史に残る抗菌薬となりました。

両社ともに1980年代から、グローバルでの事業展開・新製品の開発上市を行い、**プラバスタチン**、**レボフロキサシン**、**オルメサルタン**は、ブロックバスターとなりました。日本においては、誠実で信頼される営業活動で高いプレゼンスを維持していました。そのような両社の歴史を受け継ぎ、2005年に統合し、誕生したのが第一三共です。

第三共の歴史

## 三共の歴史



1899

三共商店を設立（塩原又策（左写真）、西村庄太郎、福井源次郎の共同出資による）  
消化酵素剤**タカチアスターゼ**を発売（1894年、高峰讓吉博士が麹菌から消化酵素タカチアスターゼを発見）

1902

世界で初めて抽出に成功した副腎髄質ホルモン剤**アドレナリン**（製品名アドリナリン）を発売



1910

鈴木梅太郎博士（1920年、三共の学術顧問に就任）、米ぬかから世界初のビタミンB1（**オリザニン**）を発見し、ビタミン学説の基礎を確立



1913

三共株式会社となる  
初代社長に高峰讓吉博士が就任

1951

かぜ薬ルルを発売



1986

消炎鎮痛剤**ロキソプロフェン**（製品名ロキソニン）を発売



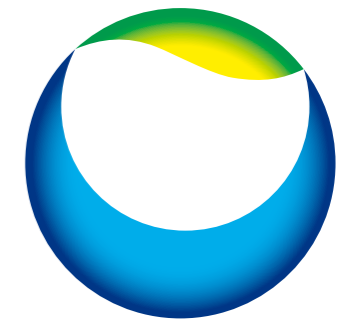
1989

世界的に画期的な高コレステロール血症治療剤**プラバスタチン**（製品名メバロチン）を発売



2002

グローバル製品の hypertension 治療剤**オルメサルタン**（製品名オルメテック、ベニカー）を発売（2004年に日本で発売）



Daiichi-Sankyo

## 第一製薬の歴史



1915

慶松勝左衛門、アーセミン商會を設立  
当時、国民病の一つであった梅毒治療薬**サルバルサン**国産化

1918

第一製薬株式会社が発足  
初代社長に柴田清之助が就任



1921

最長寿命薬となる血液収縮止血・喘息治療薬**アドレナリン**（製品名ボスミン）の製造を開始



1965

抗プラスミン剤**トラネキサム酸**（製品名トランサミン）を発売



1981

抗血小板剤**チクロピジン**（製品名パナルジン）を発売

1985

広範囲経口抗菌剤**オフロキサシン**（製品名タリビッド）を発売



1993

広範囲経口抗菌剤**レボフロキサシン**（製品名クラビット）を発売

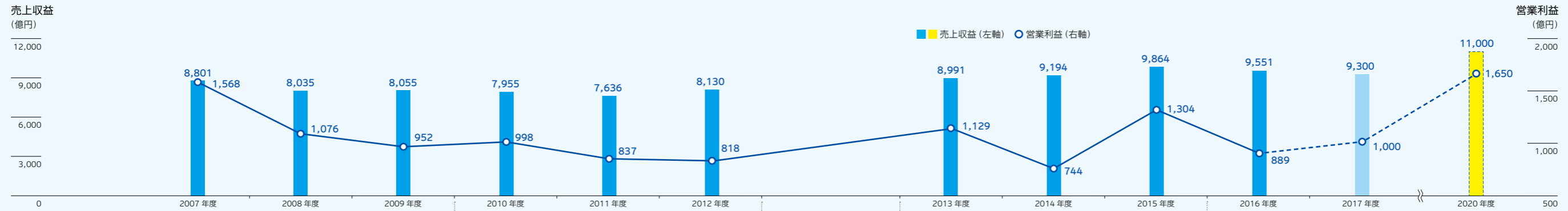


2005年 .....  
第一三共（三共と第一製薬との共同持株会社）を設立してスタート  
2007年 .....  
新生第一三共グループとしてスタート

# 第一三共の沿革 ~統合後の歩み~

第一三共は、100年の長い期間にわたり受け継がれてきたサイエンス・テクノロジーの強みを活かして、先進的医薬品の創出に挑戦し続けています。旧社のサイエンス・テクノロジーから生み出されたオルメサルタン、エドキサパンを第一三共として強力に育てグローバル製品として成長させてきました。第一三共の将来を担うADCフランチャイズにおいても三共のバイオ系の技術が抗体部分に、第一製薬の合成の技術がリンカーと薬物部分に引き継がれてきています。

※ ランバクシー社を除く  
 ※ 2011年度まで日本基準、2012年度よりIFRS



また、豊富なグローバルタレントとともに、グローバル体制もさらに深化させ、時代にふさわしいガバナンスを目指します。日本においては、誠実で信頼される実直な活動から、MR活動に対する評価だけでなく、2016年度には国内医療用医薬品の売上でもNo.1となりました。多様な医療ニーズに幅広く対応すべく、イノベーション医薬品事業だけでなく、ジェネリック医薬品、ワクチン、OTC医薬品関連の事業と併せて、日本でのプレゼンスをさらに高めていきます。

	第1期中期経営計画	第2期中期経営計画	第3期中期経営計画	第4期中期経営計画	
中期経営計画の取り組み概要	<b>統合シナジー創出と成長基盤の拡充</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>血栓・がん・糖尿病領域の重点化</li> <li>オルメサルタンフランチャイズの極大化</li> <li>2008年のランバクシー社のグループ化</li> </ul>	<b>グローバルハイブリッドビジネスの推進</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>血栓・循環代謝・がん領域の重点化</li> <li>日本事業の基盤拡充</li> <li>フロントエンド・バックエンドでのランバクシー社との協業</li> </ul>	<b>パテントクリフを越えた持続的成長の実現に向けた取り組み推進</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>血栓・循環代謝・がん領域の重点化</li> <li>2014年4月～2015年4月ランバクシー社の分離決定・完全売却</li> <li>イノベーション医薬品事業への回帰</li> </ul>	<b>2025年ビジョンの達成に向けた経営の転換</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>2017年度パテントクリフの克服</li> <li>持続的成長基盤の確立</li> </ul>	
新製品の販売	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本 ロキシニンテープ</li> <li>米国 エイゾール</li> <li>米国 エフィエント</li> <li>欧州 セビカー</li> <li>欧州 エフィエント</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本 ロキシニンゲル</li> <li>日本 レザルタス</li> <li>日本 イナビル</li> <li>日本 ネキシウム</li> <li>日本 メマリー</li> <li>日本 リクシアナ</li> <li>日本 ランマーク</li> <li>日本 テネリア</li> <li>米国 トライベンゾール</li> <li>欧州 セビカー HCT</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本 プラリア</li> <li>日本 エフィエント</li> <li>米国 インジェクタファー</li> <li>米国 サベイサ</li> <li>米国 モバンティック</li> <li>欧州 リクシアナ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本 ビムパット</li> </ul>	
重要な経営判断	事業展開地域展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>欧州 トルコ・アイルランド展開</li> <li>米国 プエルトリコ展開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本 ジェネリックビジネス開始</li> <li>日本 ワクチンビジネス開始</li> </ul>		
	製品導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本 デノスマブ</li> <li>米国 チバンチニブ</li> <li>欧州 チバンチニブ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本 ネキシウム</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米国 CL-108</li> <li>日本 ビムパット、フルミスト</li> <li>グローバル TS23</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本 ハートセル</li> <li>日本 バイオシミラー 9品目</li> <li>日本 KTE-C19</li> <li>日本 AG4品目</li> <li>米国 モルファボンド、ロキシボンド</li> </ul>
	買収	<ul style="list-style-type: none"> <li>欧州 U3ファーマ社</li> <li>米国 ファルマフォース社</li> <li>グローバル ランバクシー社</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米国 ベツレヘム工場、プレキシコン社</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米国 アンビット社</li> <li>日本 アイム社</li> </ul>	
	事業再編	<ul style="list-style-type: none"> <li>大阪工場閉鎖</li> <li>静岡工場譲渡</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>秋田工場譲渡</li> <li>日本・米国・欧州事業再編</li> <li>サン・ファーマ社によるランバクシー社吸収合併</li> <li>サン・ファーマ社株式売却完了</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>欧州営業体制再編</li> <li>第一三共ケミカルファーマ平塚工場閉鎖決定</li> <li>米国ベツレヘム工場売却</li> <li>ドイツU3閉鎖</li> <li>第一三共インド閉鎖決定</li> <li>アスピオファーマ閉鎖決定</li> </ul>
ESG	<ul style="list-style-type: none"> <li>ガバナンス 取締役：任期1年、10名中4名が社外取締役</li> <li>ガバナンス 指名委員会、報酬委員会設置 (社外取締役により構成)</li> <li>ガバナンス 監査役会設置 (4名中2名が社外監査役)</li> <li>ガバナンス 執行役員制度</li> <li>FTSE4Good<sup>*1</sup>に初選定、以降継続</li> <li>Dow Jones Sustainability Indices<sup>*2</sup> (Asia Pacific Region)に初選定、以降継続</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>家族のきずなシアター開始</li> <li>第一三共グループ企業行動憲章の改正</li> <li>Daiichi Sankyoくすりミュージアム開設</li> <li>開発途上国での移動診療サービス開始</li> <li>国連グローバル・コンパクト参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ガバナンス 社外役員の独立性判断に関する具体的基準を制定</li> <li>ガバナンス コーポレートガバナンス・コードの各原則をすべて遵守・実施</li> <li>グローバルヘルス技術振興基金「GHIT Fund」参画</li> <li>第一三共グループバリューレポートがUCDA アワード<sup>*3</sup> 2015最優秀賞受賞</li> <li>第一三共グループ個人行動原則の制定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ガバナンス 社外監査役1名増員 (5名中3名が社外監査役)</li> <li>ガバナンス 譲渡制限付株式報酬制度導入</li> <li>Access Acceleratedイニシアティブ<sup>*4</sup>への参画</li> <li>Dow Jones Sustainability Indices (World Index)に初選定 (2017年)</li> </ul>	

**2025年ビジョン**  
 がんに強みを持つ先進的グローバル創薬企業

第4期中期経営計画については次ページ以降(P18～47)をご覧ください。

\*1 FTSE Russell社が、企業の社会的責任に対する取り組みを評価している指標  
 \*2 S&P Dow Jones Indice社とRobecoSAM社が、企業の持続的可能性を評価している指標

\*3 コミュニケーションデザインに関する表彰  
 \*4 製薬企業が、世界銀行や国際対がん連合と連携し、低/低所得国の非感染性疾患の予防や診断、治療等の改善に取り組む活動